

意見陳述書

2017（平成29）年4月14日

佐賀地方裁判所民事部 御中

原告 風見 梢太郎

私は日本民主主義文学会という文学団体に所属し、小説を書いています。この団体の常任幹事をしております。福井県の敦賀市に生まれ、中学二年までをこの地ですごしました。京都大学の電気工学科を卒業して当時の電電公社（現NTT）の電気通信研究所に入り、ここに勤務しながら小説を書いてきました。日本科学者会議の会員でもあります。

私は敦賀の出身ということもあり、もともと原発には強い関心を持っていました。敦賀は歴史の古い美しい町であり、海岸には日本三大松原の一つと言われる気比の松原があります。また古代の遺跡や戦国時代の有名な城址もあり、この点でも唐津や玄海町に似ています。このような歴史的景勝の地に原発ができてしまったことに対する地元の方々の無念な気持ちが、私には大変よくわかります。

福島第一原発の過酷事故が起こってから、私は多くの人に読まれる小説という形で、事の本質をわかりやすく伝えなければならないと思いました。私は原発の専門家ではありませんが、電気工学を専攻したということもあって、発電や送配電の知識はありますし、友人には電力会社や原発産業に働いていた人もいます。また日本科学者会議には原発や被曝の専門家もおり、そういう人たちと情報交換もできます。私は、自分こそが原発に関わる小説を書く責任を負っていると感じたので、たくさんの作品を書き『民主文学』という全国的な文芸雑誌や「しんぶん赤旗」に発表してきました。日本の中で、一番たくさん原発にかかわる小説を書いてきたのではないかと自負しております。本になった

ものは『風見梢太郎 原発小説集』と『再びの朝（あした）』です。

私がどのような作品を書いてきたのかを少し紹介させていただきます。最初に書いたのは「週休日変更」という作品です。福島第一原発が爆発した年の夏、全国的に節電が呼びかけられ、企業では電力の平均的な使用を目的に週休日に変更されました。私の勤めていた研究所でも、いきなり土曜、日曜が出勤日になりました。子どもを保育園にあずけている人、老人を抱えデイサービスを利用している人たちが困っていました。そのことを書こうと思いました。作品の中で、政府が極端な節電を呼びかける背景には、「原発を稼働しないとこういう状況が続くのだぞ」という脅しがあることを告発しています。続いて「線量計」という作品を書きました。これは原発労働者の被曝を扱った作品で、舞台は敦賀です。原発は、そこに働く人たちの被曝の犠牲の上に成り立つシステムであることを知ってもらいたいという思いがありました。「収束作業」という作品には、福島第一原発で収束作業にたずさわる労働者のことを書きました。原発で働く人々の宿泊するいわき市湯元温泉のホテルに泊まりこんで取材しました。一日の被爆量が何と1ミリシーベルトを越えている人がいることがわかりました。リンゴ農家への取材では、人のいなくなった避難区域で猪が激増しその猪が山を越えてやってきて大きな被害が出ていることを知りました。猪は捕らえても食用にはならず、解体して一般ゴミとして焼却しているそうです。リンゴが売れなくて出稼ぎに出ていることや、補償が打ち切られればたちまち廃業になることなどもお聞きしました。「海洋投棄」という作品は、福島第一原発の汚染水処理問題を扱い、汚染水を海に流そうとする東電の意図に警告を発しています。ちょうど汚染水の貯蔵が限界に来ていることが大きな話題になっている時期に発表したのも、反響が大きかったです。この作品を書くにあたって、放射性廃棄物についてあらためて調査し、取材もしました。放射性物質であるトリチウム（三重水素）についても調べ、この物質がたとえ事故がなくても通常の運転で海に放出されてきたことを知りました。これは「原子力施設運転管理

年報」という公式文書に報告されています。たとえば玄海原発では、2009年には81兆ベクレル、2010年には100兆ベクレル、2011年には56兆ベクレルのトリチウムを海に流しています。原発などから放出されるトリチウムは、自然界に存在するトリチウムと比べても決して無視することのできないほどの量であり、しかも施設から直接海に排出されれば、複雑な海岸線に高い濃度でとどまる可能性があります。その後、私は、建屋ギリギリに造られる凍土遮水壁の建設に従事する作業員の被曝、凍土遮水壁という方式が選ばれたカラクリを告発する作品を書いて現在にいたっています。

原発が未完成・未成熟な技術であることは、日本に原発ができた当初から心ある科学者、技術者から指摘されてきました。一番の問題点は、運転によって高いレベルの放射性廃棄物がどんどん蓄積されていくことです。たとえ核燃料サイクルというものが成功しても回収され再利用されるのはプルトニウムとウランだけであり、その他の高レベルのあらゆる放射性物質はそのまま溜め込まれることとなります。もちろん再利用されたプルトニウムなどからもまた放射性廃棄物が出ます。これは改良が進めば克服できるといった性質の欠陥ではなく、現在私たちが知りうる自然法則に基づけば克服は本質的に不可能です。世の中に出される技術というものは、研究・開発段階において様々な理由で淘汰され、実用に供された技術の中でも長く生き残っていくものは多くありません。使いにくいもの、改良できないもの、危険なもの、経済的に引き合わないものなどは、見捨てられ別の技術に置き換えられます。原発などは、本来とっくに淘汰されてしかるべき技術だと私は思います。それが今まで生き残っているのは、アメリカの意図を受けた日本の政府が強引に原発の開発をすすめて、手厚く保護してきた結果です。

小説を書き続ける中で、私たちは原発と共存できない、という思いをますます強く抱くようになりました。事故が起こった時に制御できず、甚大な被害を及ぼすようなシステムは、決して社会に導入してはならないものです。政府、

電力会社、原発産業が原発の再稼働を目論むかぎり、私はこれからも原発に反対する立場で小説を書き続けるつもりです。玄海原発の再稼働を許さず、ただちに廃炉に向かうことを強く望みます。そのことをもう一度述べて私の意見陳述を終わります。

○

○